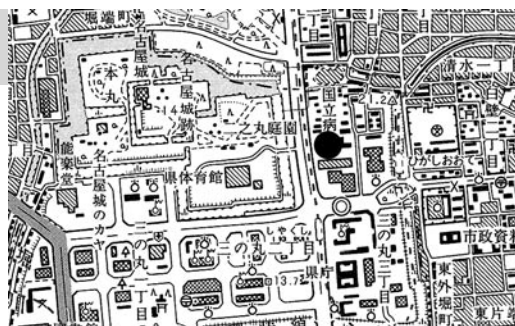


なごやじょうさんのまる

名古屋城三の丸遺跡

所在地	名古屋市中区三の丸 4-1
調査理由	国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備
調査期間	平成 14 年 4 月～9 月
調査面積	1,100 m ²
担当者	石黒立人・鈴木正貴・鶴飼雅弘

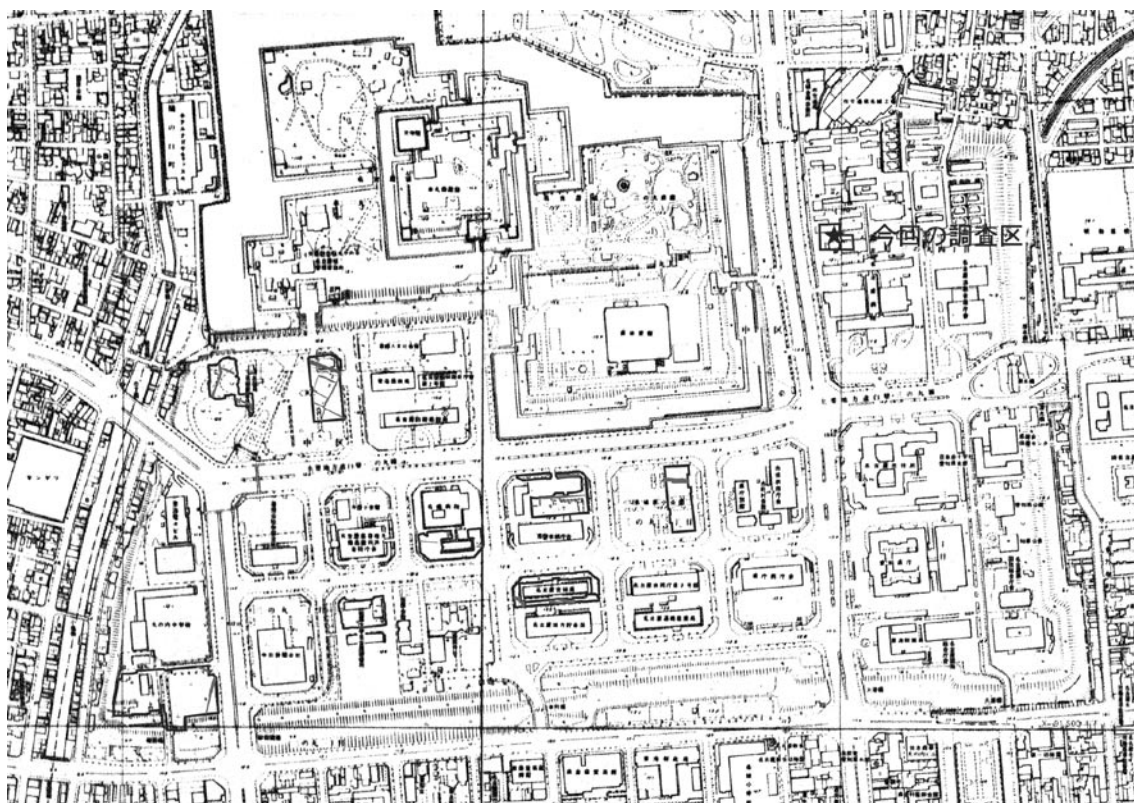


調査地点 (1/2.5 万「名古屋北部」)

調査の経過 本遺跡は国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備のための事前調査として、国立名古屋病院から愛知県教育委員会を通じて受けた委託事業として、平成 14 年 4 月から 9 月にかけて実施した。調査面積は 1100 m²である。

立地と環境 名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する名古屋城のうち、本丸・二の丸の南および東に配置された名古屋城三の丸一帯に広がる弥生時代、古代、中世から近世にかけての複合遺跡である。調査地点の現地表面の標高は約 13 mを測る。

今回の調査は二の丸の東側、現国立名古屋病院の敷地内で行った。この一帯は名古屋城築城当初武家屋敷が広がっていたが、1651 (慶安 4) 年京都から広幡忠幸を迎える際ここを屋敷地として与え、その後 3 代藩主徳川綱誠が藩主就任まで過ごしたことから御屋形の称が始まり、以来幕末に至るまで藩主の一族・元藩主の側室が住んだ。廃藩置県後御屋形は取り壊され、跡地は陸軍第三師団東練兵場となったが、太平洋戦争末期名古屋陸軍病院東練兵場臨時分院が設置され、戦後国立名古屋病院に改組され現在に至る。(鶴飼雅弘)



調査の概要 今回の調査では、古墳時代から昭和時代前半に至るまでの様々な時期の遺構や遺物が確認された。検出された遺構は大きく、A期：古墳時代後期～平安時代（6世紀末～9世紀）、B期：鎌倉時代～室町時代（12世紀～14世紀）、C期：戦国時代（15世紀～16世紀）、D期：江戸時代初期（1610年～1650年頃）、E期：江戸時代前期～江戸時代末期（1650年頃～19世紀中頃）、F期：明治時代～昭和時代前半（1873年～1945年）の6時期に大別することができる。ここでは時代順に記述を進める。

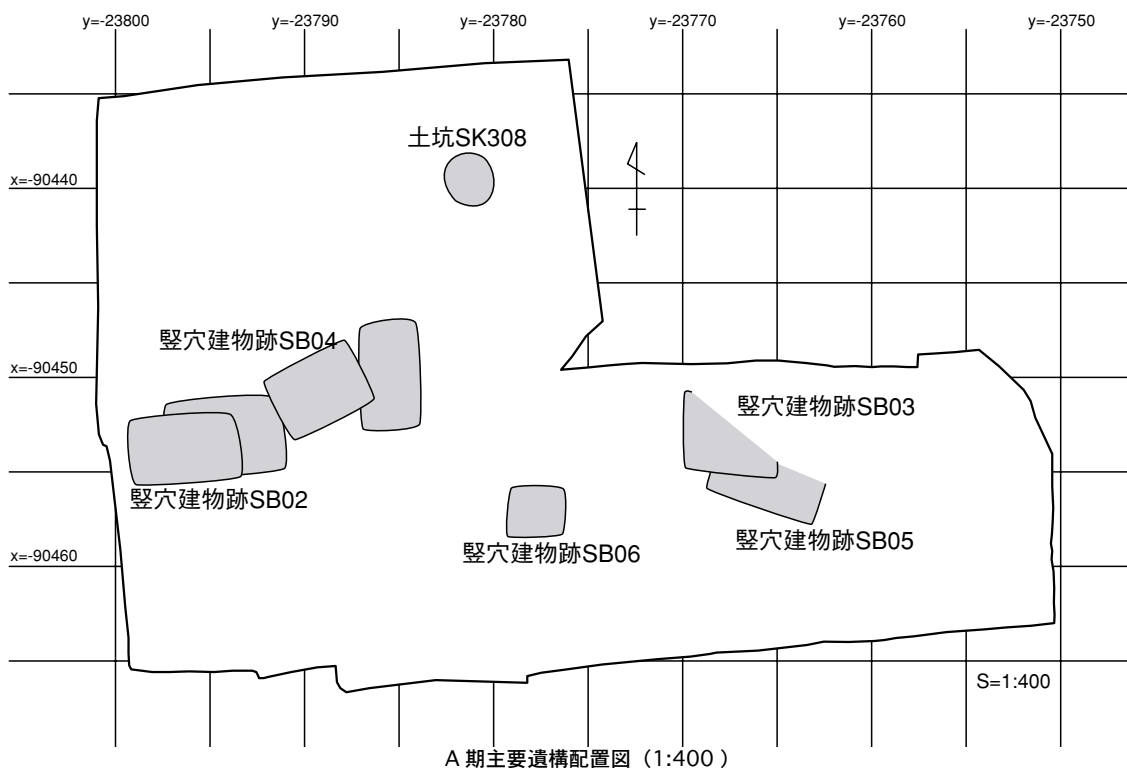
A 期 古墳時代から古代の遺構としては、古墳時代後期の土坑SK308と奈良時代から平安時代初頭に位置付けられる竪穴建物跡群などが確認された。

SK308は直径約2mを楕円状の形で、中から6世紀末～7世紀初頭の須恵器の杯身や杯蓋や甗などが出土した。この他に遺構には伴わないが、須恵器の円筒埴輪片が数点出土しており、付近に古墳が存在していたことが予想される。

一方、竪穴建物跡はその可能性があるものまで含めると8基が検出された。SB02は平面形が約6m×約4mの規模を持つ隅丸長方形であり、床面には貼床の痕跡が確認された。竪穴建物跡はいずれもカマドを確認することができなかった。これらの竪穴建物跡群は出土遺物から見て8世紀から9世紀にかけて存在したものと推測される。

B 期 鎌倉時代から室町時代の遺構には区画溝と井戸などが存在する。SD27はほぼ東西方向に走る比較的小規模な溝である。SD27以外に確実にこの時期と考えられる溝が確認されていないため、区画の規模などを特定することができないが、井戸SK310の存在などからみて、SD27は居住域（屋敷）を区画したものと想定される。SK310は掘肩の平面形が大きい素掘りの井戸で、中から13世紀後半から14世紀前半に位置付けられる山茶碗などが出土した。

この時期に属する遺物の出土量はそれほど多くなく、調査区付近は比較的小規模な集落が展開したものと想定される。



C 期 (戦国時代) 戦国時代の遺構としては、区画溝や井戸などが発見された。SD17は幅が約1m、深さが約1mの規模を持つほぼ東西方向に走る溝で、西端で南に屈曲している。この他に調査区中央部でSD35・SD36・SD39などの小規模な溝が南北方向に平行して走っており、これらの溝で挟まれた細長い空間が道路であった可能性が考えられる。井戸は調査区の東側でSK147やSK146などが確認された。これらは素掘り井戸で中から15世紀後半から16世紀前半に位置付けられる瀬戸美濃窯産陶器や大量の土師器内耳鍋などが出土している。

発見された溝や道路は屋敷境を構成すると考えられ、SD17の南北に2つの屋敷を想定することができる。これらの屋敷は出土遺物の時期からみて、戦国時代の那古野城に伴うものと考えられる。

D 期 17世紀前半に所属する遺構としては、屋敷や屋敷の内部を区画する溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑などの遺構が確認された。SD12・SD14・SD22は幅が約1m、深さが約1mを測る屋敷を囲む溝と想定され、SD12とSD14の間に挟まれた細長い空間が道路であったと考えられる。また、SD24は中に柱穴が等間隔に並ぶ布堀状の溝で、塀などの基礎構造であったと思われる。このSD24はSD12などによる屋敷割りを変更して作られた可能性が想定され、門と推定される掘立柱建物跡が付随している。この他には、掘肩の平面形が比較的小さい素掘り井戸(SK144やSK163など)や、約2.5m×約6mの隅丸長方形の平面形で深さが2m弱を測る大きな土坑SK185などが存在する。出土遺物には、瀬戸美濃窯産陶器の皿・笠原鉢・播鉢や焼塩壺などがある。特筆すべきものとしては、区画溝SD12から調査区北側に屋敷を構えていたと推定される寺西藤左衛門の家紋鬼瓦が出土している。

出土遺物の時期や家紋瓦の存在などから、溝で区画された空間は御屋形が成立する以前の近世名古屋城の有力家臣たちが居住した武家屋敷であったと考えられよう。具体的な屋敷割の比定は今後の課題であるが、調査区は『金城温古録』に記載された石川光忠、粟生将監、一色竜雲等が屋敷を構えていた場所に相当すると想定される。





SD02 など (A 期)



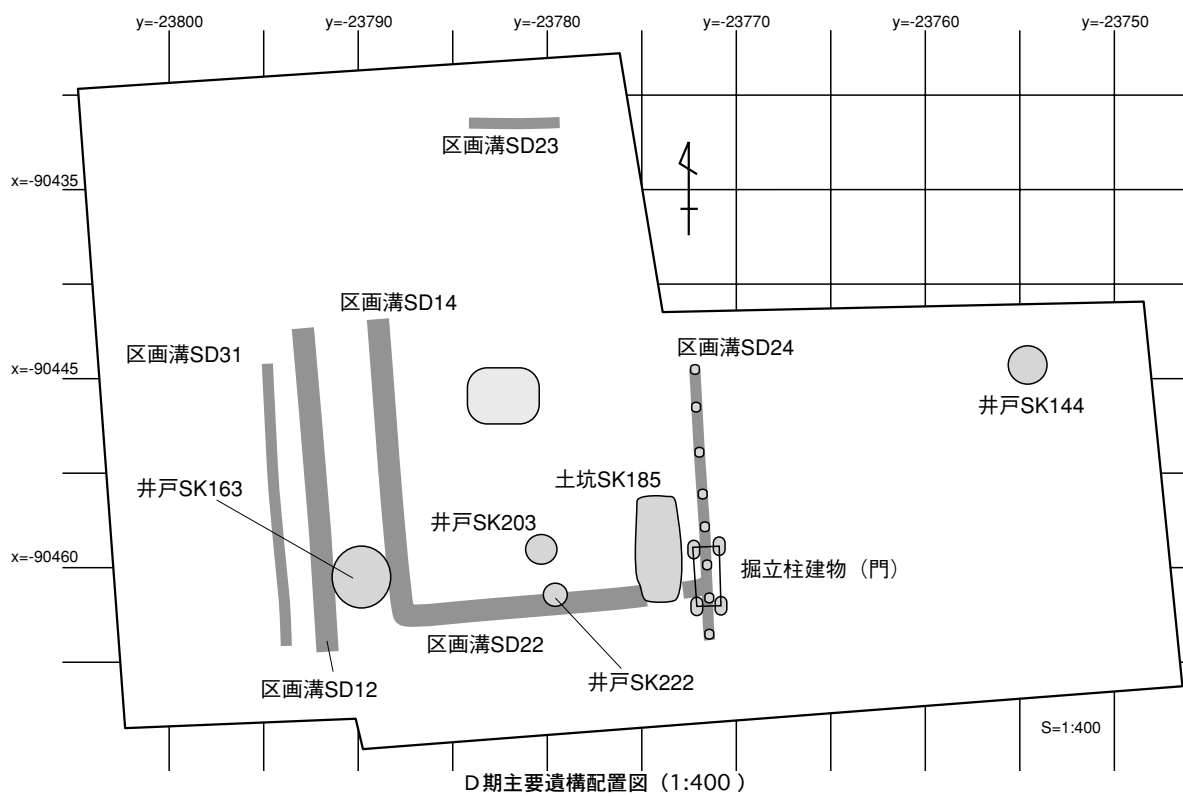
SD17 など (B～D 期)



SD24・SK185 (D 期)



SD31・SD12・SK163 (D 期)



E 期
(江戸時代
前期～後期)

この時期では、まず調査区南西部を中心に広い範囲で厚さが1m弱を測る盛土が確認されており、D期(江戸時代初期)の遺構を埋め立てて造成され、大きく屋敷割りが変更されたことが判明している。この盛土(整地)層の上面から掘削されたと考えられる遺構として、庭園に伴う池、石組溝、地下室、石列、掘立柱建物跡、井戸、廃棄土坑など多種多様な遺構が存在する。

石組溝は合計で4条(SD01～SD04)確認され、このうちSD01は内法幅が約65cmを測る立派なものである。SD03の北側は石材が抜き取られており、裏込めの栗石のみが残された状態であった。これらの石組溝は建物に伴う排水路などの施設と考えられる。SD01の南側には切石で構成された石列SX09や礎石の根石と考えられる集石が検出されており、これらは建物の基礎構造の一部であった可能性が想定される。地下室SK94は平面形が2.8m×2.7mのほぼ正方形となり深さは約1.8mを測るもので、17世紀末から18世紀前半にかけての肥前窯産磁器碗や瀬戸美濃窯産陶器汁次などの遺物が出土している。調査区の東側には非常に大型の廃棄土坑群SK01があり、中からは大量の瓦や石材が出土した。このSK01最下層からは鉋屑や端切れ材などの木材の廃材も多量に出土しており、これらの出土遺物からみてSK01は建物の増改築などの際に出てきた廃棄物を埋めて処分した際に構築されたものと推測される。調査区東端部と北東端部では各々掘立柱建物跡の一部が確認されており、この他に屋敷内を区画する溝や小型の廃棄土坑などの遺構も認められた。

出土遺物としては、肥前・京都・瀬戸美濃窯産陶磁器などが認められるが、これまでの名古屋城三の丸遺跡の調査事例と比較すると陶磁器類の出土量がやや少ない点の特徴となっている。また、池などの遺構から出土した瓦の中には、御霊廟など特別な場所で出土する場合が多いとされる緑釉の陶器瓦が少なからず出土している。

石組溝や後述する庭園に伴う池、緑釉瓦の存在や出土遺物の時期などからみて、E期の遺構や遺物は名古屋城を描いた各種絵図や記録にみえる「御屋形」に伴うものであると推測される。



調査区全体 (E期)



石組溝 (E期)

庭園に伴う
池

E 期に属する遺構で最も注目される遺構は池 SX02 である。SX02 は約 10m 四方の大きさで深さは約 1.2m を測り、東西両側には内側に張り出し部（岬）を持つものである。池の周囲の壁は大きな穴が開いた部分や漆喰の壁が残った部分などがあり、本来は巨石を池の周りに配置しその隙間を漆喰壁で覆い尽くしたものと考えられる。北壁が直線的に作られていることや石の配置などから考えると、池は北側から観賞するように造られていると思われる。おそらく、池の北側に書院などの建物が存在し、そこから庭園の風景を楽しんだものと想像される。

池 SX02 の具体的な構造は次のとおりである。水の取り入れ口は南西部分の漆喰で造られたスロープが該当するが、排水口は北東部にある幅広いやや浅い溝 SD41 が存在する他は確認できなかった。池の西側の張り出し部（岬）の先端には巨石が何個かはめ込まれていたと復元され、この部分が磯浜を表現していると考えられる。一方、反対側の東側の張り出し部（岬）の上部には白い小玉石が敷かれており、この部分が洲浜を表現していると思われる。東側の張り出し部の北側には階段状遺構が設置されていた。池の底は、古い段階では溝状の凹地が設けられ、新しい段階では黄色粘土を貼り付けた上に玉石が敷かれていた。このような状態からみて池全体の構成は、南西部の上流から磯浜や洲浜を経て北東部に水が流れていくという形に復元されよう。

今回確認された石による装飾が施された池は庭園に伴うものと考えられ、名古屋城二の丸庭園などで類例が認められる。しかし、名古屋城三の丸にある他の家臣の武家屋敷ではこれまでの発掘調査で庭園遺構は見つかっておらず、今回初めてこうした庭園遺構が発見されたことは、御屋形が特別な存在であったことを示す貴重な事例となるだろう。そして、名古屋城二の丸庭園は大規模な回遊式庭園であるが、今回確認された「御屋形庭園」は池の規模などから見て、書院などから眺める池泉庭園と位置付けられよう。



E 期主要遺構配置図 (1:400)



SX02 水の取り入れ口



SX02 南壁 (正面)



SX02 東張り出し部 (洲浜)



SX02 西張り出し部 (磯浜)



池 SX02 全体

F 期 1873 年に陸軍第三師団が名古屋に駐屯した際に、今回の調査地点は東練兵場になっていた。調査の結果、現地表下約 1.2m 前後で東練兵場の地面と考えられる硬化面とその上に造られた礎石建物跡 SB01 が発見された。SB01 は 7.1m（8 間）× 25.3m 以上（28 間以上）の規模を持つと復元され、礎石の状態が脆弱であることなどからみて太平洋戦争の終戦直前に建てられた名古屋陸軍病院第二分院の病棟と推定される。また、この時期の遺物として「名古屋陸軍病院」と記された瀬戸窯産磁器湯呑などが出土している。

ま と め 今回の調査の結果、これまで調査事例がほとんどなかった名古屋城三の丸遺跡の北東部の様相が明らかとなり、多様な時期にわたる多くの成果が得られた。最後に箇条書きでその成果をまとめておく。

1、古墳時代から古代そして中世にかけて、名古屋台地北端の縁辺部に遺跡が展開することが明確となった。

2、戦国時代的那古野城の中心は現在の二の丸にあったと言われているが、今回初めて二の丸の東側地域にも那古野城に関連する屋敷が広がっていたことが想定された。検出された溝は松田訓が設定した正方位溝群（松田 2002）に属するものと考えられ、時期的には古瀬戸後期末段階まで遡る可能性が高い。那古野城の変遷を考察する上で貴重な情報が得られたといえる。

3、江戸時代初期の武家屋敷が確認され、これらは 17 世紀中頃に廃絶されその後大規模な整地を伴って御屋形が造成されたことが判明した。また、17 世紀前半の中でも屋敷割の変更があったことが考えられ、近世名古屋城三の丸の武家屋敷の成立過程を考えるためのデータが追加された。

4、御屋形の時代では、庭園に伴う池や石組溝などこれまでの名古屋城三の丸の武家屋敷とは異なる遺構群が発見された。遺物においても緑釉陶器瓦の存在など御屋形の特異性を表現する状況を読み取ることができたが、今後は御屋形と三の丸の武家屋敷との間で遺構や遺物の様相が具体的にどう相違しているのかをより詳細に検討していく必要があるだろう。（鈴木正貴）

文 献 松田訓 2002「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要第 3 号』愛知県埋蔵文化財センター



SB01 (F 期)



SK94 出土遺物 (E 期)